

「ヒト中心主義」は成立するか～環境破壊と感染症流行～

ながれ

大井 玄 (おおい げん/東京大学名誉教授)

新型コロナウイルスのパンデミックは、我々の行動パターンを変えてしまった。同時にヒトとウイルスとの切っても切れない関係を、思い出させてくれた。

ウイルスと聞くとすぐ病気を連想するが、我々との関係は非常に深く広範で哺乳動物の出現にさえ関わっている。たとえば、哺乳動物の仔が母親の子宮の中で育つのは、ウイルスが造った一枚の細胞膜が母親のリンパ球が仔の血流に入るのを妨げてくれているからだ。ウイルスとの付き合いは、ヒトとして存続している間、絶えることはない。

新型コロナウイルス対応

公衆衛生学では感染症流行を吟味し、影響を予測するうえで三つの要因を区別する。

①病原体、②宿主（宿主）、③環境条件

第一の要因の病原体として、コロナウイルスの系統には、ふつうの風邪、肺炎や気管支炎をおこす類がある。しかし2002年に中国にはじまり、世界中で約8,000人の感染者をだした劇症急性呼吸器症状（SARS）のように、高齢者では致死率が数十パーセントに達する恐ろしいものもある。新型コロナウイルスの感染性は、SARSよりも高いが、毒性は比較的に低いように見える。

第二の要因の宿主については、高齢者や、持病があり免疫抵抗力の衰えた者は、当然のことながら死に至る率が高くなる。

第三の要因は広い意味での環境条件である。

中国経済の規模の拡大につれて、中国とそれ以外の国々とのつながりが急速に増大した。これが世界各国に広がったパンデミックをおこしている第一のポイントだろう。

SARS 流行の2年後の2005年、中国本土からの国際空路は233本に過ぎなかったのに、2016年までに3倍以上の739本に増えた。同じ期間に中国に出入りした人の数は、約300万人から5,100万人と爆発的に増えている。

第二のポイントは、国の指導者がどのくらい感染症の流行ポテンシャルを理解し、冷静な科学的対応を行うかである。

○事例一：中国の初期対応

この感染症の最初の症例が中国武漢で発見されたのは、2019年12月1日で、同月中旬には、医療関係者に流行拡大の警戒感が高まる。この時が当局が直ちに対応し始める機会だった。

しかし当局は公衆衛生的危機について警鐘を鳴らそうとした人たちを沈黙させ、新感染症発生の事実は隠蔽されたままだった。武漢市中心病院で患者の治療にあたった李文亮医師は、友人たちに危険性を伝えていたが、共産党と警察当局によって、デマを流したのは誤りだったという供述書に署名させられた。彼はその後自身が感染し死亡する。

習近平主席の当局は、この時点で医師たちの意見を聞き、流行拡大を防ぐ手段をとるべきだったが、その機会を逸しパンデミックの引き金を引いた。

中国は12月31日にWHOに新型コロナウイルスについて通報するが、自国民は蚊帳の外に置かれた。武漢の市長は2020年1月後半まで感染症についての発言を許されなかった。

政府は1月23日に武漢を「隔離検疫」する断固とした措置をとったが、市長によれば、すでに500万人が武漢を離れていた。

○事例二：米国の初期対応

「アメリカ・ファースト」を叫ぶトランプ

大統領は、地球が小さくなり、感染症が人間行動にどう連動しているかに気づいていない。

彼は地球規模の保健は不必要だとみて、2014年のエボラ熱流行の際つくられたパンデミック対応機関を廃止し、CDC(アメリカ疾病予防管理センター)の海外部局を49か国から10か国に減らし、さらに今回のような新型ウィルスがヒトに侵入するのを監視する部局も廃止していた。新型コロナウイルス感染症流行についても、一貫して楽天的な発言である。

1月末、記者にパンデミックについて意見を聞かれると、「我々は完全にコントロールしている。中国からは一人だけしか入っていない…大丈夫だよ。」2月27日の発言「そのうちに、奇跡的に、それは消えるよ。」

4月14日、大統領はWHOへの拠出金を止める意向を表明。理由は「昨年12月、中国武漢からの情報で人から人への感染を疑うべき根拠があったのにWHOは調査しなかった。基本的な義務を怠り、その過ちによって多くの人たちが死亡した。その責任を取らなければならない」というものだった。

5月31日、米国の感染者数は180万人に迫り、死者はすでに10万人を超えた。大統領の怠慢による犠牲者はそのどのくらいを占めるのだろうか。

基底にある環境条件—人口増

過去半世紀ほどの間に、動物由来の感染症が急増している。

地球という閉鎖系において人口の増加は、野生動物の棲息地を減少させ、ヒトと接触する機会を増やすから、野生動物が宿主でヒトには未知のウィルスと遭遇する機会も増えざるをえない。1950年以降の世界人口の推移をみると、1950年に約25億人だったものが、2020年に約78億人になっている。わずか70年間に人口は50億人以上増えた。2050年、世界人口は約97億人で、さらに20億人の増加があるだろう。2100年には約109億人と推

計されている。

人口増の地域による違いは大きく、人口の急増が最初にはじまったヨーロッパでは、2020年のピークを過ぎると人口は減少すると推定されている。世界人口の6割を占めるアジアも増加率は低下を続け、2055年頃人口はピークを迎え、その後は減少に転ずると予測される。であるならば、今後の世界人口の増加のほとんどがアフリカに生じることになる。その人口は2020年の約13億人から、2100年には約43億人へと3倍以上に増加すると推定される。

スラムという培養器

20世紀初めには、世界の都市居住者は人口の15%に過ぎなかったが、2008年頃に都市人口は農村人口を上まわった。農村から都市への流入が続き、スラムを形成する。2010年から2025年の間に、世界の100万人都市は324から524に増え、1,000万人以上のメガ都市は19から27に増える。

この都市人口の増加は、ほとんどが発展途上地域で起こり、サハラ以南のアフリカ、南アジア、西アジアなどでスラムが急激に増えている。都市人口に占めるスラム人口の割合は、2005年でアフリカは7割以上、南アジアでは6割近い。アフリカでは15年、西アジアでは26年でスラム人口が倍増する。

ヒトが密集し、上水道・下水道が備わらず、ごみが除去されず、医療機関にも乏しい都市のスラムは、感染症のもっとも流行しやすい条件を備えている。微生物の培養器とも見做せよう。

ヒト中心主義は成立しない

「持続可能な社会」が、地球規模において、どう定義されるのか、筆者には明らかではない。

このパンデミックは、ヒトが野生動物を宿主とするウィルスとの遭遇機会を増やしつつあることを、改めて実感させてくれた。その基底には、止めようのない人口増と、それによる自然環境破壊の拡大があるのは確かである。